

1586 年天正地震における伊勢湾沿岸の津波の再検討

Re-examination of the tsunami of the Tensho earthquake of January 18th on the coast of Ise Bay

松岡 祐也¹・都司 嘉宣²・今村 文彦³

1. はじめに

天正十三年十一月二十九日（1586 年 1 月 18 日）に発生した、いわゆる「天正地震」に関する研究はこの数年盛んに行われており、震源断層の位置を含めた地震の実態が明らかになってきた。そのなかでも関心を持たれている問題は、この地震による津波の有無についてである。特に若狭湾で発生したとされる津波被害に注目が集まっているのだが、一方で伊勢湾でも津波があったとする先行研究が存在している。

天正地震における伊勢湾沿岸地域での津波に関するものは、飯田波事の研究成果によるところが大きい。その研究成果によると飯田 1977 は穂原（三重県南伊勢町）では被害が分からないとしながらも津波高 1m くらいとし、長島（三重県桑名市）など「各島や臨海地域への海水浸入からみて 2～4m くらいあったと推定」している。また津波襲来の範囲については、伊勢湾内から三河湾、さらに志摩半島や渥美半島にまで達したと想定している。その後、飯田 1978 は津波の高さに修正を加え、「各島への海水浸入からみて 2～3m くらいと推定される」としている。

このように飯田は津波襲来の範囲や高さを示しているわけだが、飯田が「津波あり」と判断した根拠（史料記述）については、検証の必要があるように見える。飯田は引用している史料について、その信頼性についての評価を行っておらず、伊勢湾沿岸での津波が実

際にあったのかを考える上で、根拠として薄弱であると思われる。そこで、本研究では天正地震による伊勢湾沿岸地域における被害を記す史料を一覧化し、史料の素性を明らかにするとともに、伊勢湾沿岸に津波が襲来したのかを考察する。

なお、本文および表内で引用した地震史料集については、以下のような省略を行っている。『増訂大日本地震史料 第一巻』は『武者 1』、『新収日本地震史料 第一巻』は『新収 1』、『新収日本地震史料 補遺』は『補遺』、『新収日本地震史料 続補遺』は『続補遺』、『日本の歴史地震史料 拾遺三』は『拾遺 3』である。

2. 天正地震に関する伊勢湾沿岸の史料

天正地震に関する史料については、各地震史料集に掲載されているものでもかなりの数にのぼり、そのうち伊勢湾沿岸について書かれたものについては 50 点程を確認することができる。ただし、これらには史料名こそ異なるものの、実際には同じ史料を掲載しているというものがいくつも存在しており、そういった史料をまとめていくと、およそ 40 点に集約される。また、ここには自治体史の論説文も含まれており、それらを除けばさらに数は絞られる。

今回は、論説文は除きつつ、書かれた時期区分を問わずに、天正地震による伊勢湾沿岸の状況を示すと考えられる史料を一覧化した。なかには『常光寺年代記』のように記載情報が少なく、本当に伊勢湾沿岸のことを示しているか怪しいものもあるが、そういったものも掲載することとした。また、今回は地震史

¹ 仙台市博物館，東北大学大学院

² 深田地質研究所

³ 東北大学災害科学国際研究所

料集掲載の史料名ではなく、本来の史料名に直している。これは、同じ史料でありながら、異なる文献より引用したため別名を与えられて地震史料集に掲載されてしまっているものが見られる場合があるので、実数を調べる必要からこのような措置をとっている。

2-1. 史料の素性と分類

天正地震における伊勢湾沿岸について書かれたと考えられる史料をまとめると、表 1 のように、総数 26 点ほど確認することができる。

史料のうち、『多門院日記』や『家忠日記』は地震当時の人物が記したものであり、同時代の記録として信頼できる史料である。ただし、それは実体験したことを記した箇所についてのみであり、奈良で書かれた『多門院日記』に見える伊勢湾沿岸の状況は、伝聞情報によるものであることから、伊勢湾沿岸地域で地震を体験した松平家忠の日記である『家忠日記』と比較すると、情報の精度は『家忠日記』のほうが高いのではないと思われる。

このように、史料自体の質と書かれた内容の質の問題は分けて考えなければならないのだが、これは別の問題であるため、ここでは深入りすることは避ける。

2-2. 伊勢湾沿岸の被害状況

次に、表 1 の史料に見える被害について、場所ごとにどのような被害があったのか、主立った場所について見ていこう（被害地の場所については、図 1 を参照）。

2-2-1. 長島および長島城

伊勢湾沿岸での被害については、北伊勢地域、特に長島（三重県桑名市）に関する史料が多いことが分かる。当時の長島は木曾川河口にあったいくつかの島の総称であり、尾張・北伊勢地域を支配していた織田信雄の居城・長島城が存在していた。彼は、当時の政治状況における重要人物の一人であり、長島の被害に関する史料が多く残っているのは、そのような事情もあるのだろう。

現在の長島は「輪中」と呼ばれる、木曾三

川河口部の低地帯を堤防で囲った集落であるが、飯田 1987 に掲載されている復元想像図のように、天正地震当時は河口部にいくつかの島が存在していた（図 2）。

まず、多くの史料で確認できる長島城の被害を見てみよう。『黄薇古簡集』（『新収補遺』 p86・『拾遺 3』 p53）に掲載されている豊臣秀吉の朱印状の写しであるが、これは「十二月四日」の日付があることから、地震後わずか 5 日で発給されたものであることが分かる。これによれば、長島城は「今回の大地震（＝天正地震）で天守以下の建物が焼け落ちた」とあり、地震によると思われる失火で城の建物が焼失したことが分かる。また、『長島細布』（『新収 1』 p149）には「当城の殿門矢倉塀等悉破壊」「本丸多門動潰」とあることから、長島城および所在する島が甚大な被害を被ったことは間違いなさだろう。

長島周辺に存在していたとされるそれ以外の島の被害についてもいくつか史料が残っているが、その中でも『長島細布』（『新収 1』 p149-150）からは、この一帯の島々に関する詳細な被害記録を知ることができる。被災地と被害状況についてまとめると、表 2 のようになる。

この『長島細布』という史料は、勢陽長島八幡宮の宮司であった伯黄堂宗磨という人物による地誌で、享保十五年（1730）の序を持つという。現地の神社の宮司による著作であるが、地震から 150 年ほど経過して書かれたものである点には注意が必要だろう。

表 2 に挙げた被災地以外にも天正地震に関わる記載は見えるが、最勝寺（下坂手村）のように「地震の後に移転した」とあって被害状況が不明というものが多く、地震被害による移転なのか、あるいは別の理由（例えば、被害はないが地盤沈下など地形の変化が起きている、など）なのかが分からない内容になっている。また武兵衛新田（加路戸の西）では「猛水」によって今は大河となっているという記事も見られるが、この「猛水」が津波なのか洪水なのか、また天正地震にともなうものなのか判断が難しい。

表1：1586年天正地震のうち伊勢湾沿岸地域に関する史料一覧

No	史料名	記載被害地点		地震史料集の 所収ページ	津波 記事	記載内容
		旧国名	都市・郡名			
1	多門院日記	尾張		『武者1』p555, 『拾遺3』p41		美濃・尾張・江州ニハ今度ノ大地震ニ人多死云々、
2	石川忠総留書	三河	岡崎	『武者1』p556		天正十三年十一月廿九日、(雪降、)大地震、
3	豊鑑	伊勢・尾張		『武者1』p558		天正十二年霜月廿九日子の刻斗にや、おびたゞしくないふりけり (※地震)、(中略)伊勢、尾張、美濃、近江、北陸道分てあり けりとなん、
4	家忠日記	三河		『武者1』p558, 『拾遺3』p54		廿九日、(乙丑、)雪降、大なへ亥刻ゆる、前後おほへ候ハぬ由申 鳴候、こゆりハかすをしらす、
5	常光寺年代記	三河	渥美郡	『武者1』p564, 『新収1』p140		(天正)十三乙酉(中略)十二月廿九日、子刻大地震国土家崩失 人命明ル晦日ノ夜丑刻大地震如前十二月廿比迄動也
6	当代記	伊勢	長島	『武者1』p572, 『拾遺3』p53		尾州長嶋当時織田信雄居城百八里多以成川、城中家倒令焼失、
7	日本史	伊勢	亀山	『新収1』p139		伊勢国にも大異変があつて、(このたびの)地震と、その驚愕す べき破壊の中には亀山と称する城の倒壊も混じっていた。
8	真清田神社史料	尾張	一宮市	『新収1』p140		天正甲申地震、他堂構悉崩折、唯 大宮礎基牢固、些不傾側矣、
9	尾張御行記	尾張		『新収1』p141		一興禅寺 (中略)天正十三乙酉年為地震諸堂敗没且罹丙災、伝 記悉失 一法性寺 (中略)天正十三年乙酉十一月地震堂殿傾圮
10	長島記	伊勢	長島	『新収1』p147		天正十三年乙酉十一月二十一日尾勢ニ大地震ガアツタ、此ノ時平 田政ヲ湧出シテ山トナリ山ヤ野原ガ江河トナツタ、此ノ時長島城 モ大破壊サレタ
11	勢州長島記附	伊勢	長島	『新収1』p147		※1
12	長島細布	伊勢	長島	『新収1』p149		※2
13	度会郡 穂原村役場調書	伊勢	穂原村	『新収1』p151, 『補遺』p84	○	大津波あり。
14	外宮遷宮召立記	伊勢	伊勢	『新収1』p151		同十一月廿九日之宵(亥刻)大地震 人悉去家走逃子刻又弥大地 震動。人屋数多破損。人数多亡。翌日卯辰刻マテ遂不止。
15	兼見脚記	伊勢		『補遺』p67, 『拾遺3』p34		廿九日地震ニ壬生之堂壊之、(中略)江州・勢州以外人死云々、
16	神宮年代記	伊勢	伊勢	『補遺』p68		同十三(乙酉)(中略)十一月廿九日夜大地震アリ、勅使ハ柳原 大納言也御祈之事
17	張州雜志 七	尾張		『補遺』p82		同十二甲申歲十二月二十九日地大動逾年不止樓門廻廊其他殿堂皆 悉顛覆傾側矣
18	張州雜志 十	尾張		『補遺』p82		天正十三乙酉年為地震諸堂敗没且罹丙災伝記悉紛失故不詳
19	甚目寺古記略書	尾張		『補遺』p83		天正十三年霜月廿九日夜大雪大地震本堂壞以前本堂三間四面兩度 炎上以前宮殿信雄御寄進今ノ宮殿辰ノ年出来 寛文四
20	野代遺書抜抄	伊勢	野代	『補遺』p84		其後天正十三年之大地震堂塔悉汰回仏器大師御遺物至縁起等迄埋 土中僧尼敗失而可為幻無形也云々。
21	黄薇古簡集 卷五	伊勢	長島	『補遺』p86, 『拾遺3』p53		今度之大地震ニ天主以下焼散之処、其方(※飯田半兵衛)長嶋 ニ有合、茶湯道具取出候事、奇特に候、
22	藤波家旧藏文書	(伊勢)		『続補遺』p23, 『拾遺3』p52		※伊勢神宮で地震に対する祈禱が行われたことを示しており、被 害記述がないため、ここでは省略する
23	外宮遷宮近例	伊勢	伊勢	『拾遺3』p51		同十一月廿九日之宵(亥刻)、大地震、人悉去家走逃、子刻又弥 大地震動、人屋数多破損、人数多亡、翌日卯辰刻マテ不止、病惱者 不知教、
24	イエズス会 日本書簡集	伊勢	亀山	『拾遺3』p59		伊勢国では他にも大きな地震があつて、驚くべき破壊があつた。 それらの中で、亀山と称する別の城は大混乱を来たして倒壊した。
25	マカオ司教区 歴史資料	伊勢	亀山	『拾遺3』p61		伊勢国には他に大異変、地震及び驚くべき破壊があつた。それら の中で亀山と称される別の城が混乱を来たして倒壊した。
26	張州府志	尾張		『拾遺3』p68-69		興禅寺 (中略)天正十三乙酉年、為地震諸堂敗没、且罹丙災、 伝記悉失、 法性寺 (中略)天正十三年乙酉十一月地震、堂殿傾圮、

複数の地震史料集に掲載されている史料では、文字の異同が見られることから、ここでは出版年がより最近の地震史料集に掲載されているものの記載を示した。

※1 長島で複数の地点について述べており、大変詳細である。しかし、その記載内容は『長島細布』とほぼ同じであった。そのため、ここでは記載内容を省略している。

※2 この史料に記載された被害状況については表2にまとめてあるので、そちらを参照してほしい。

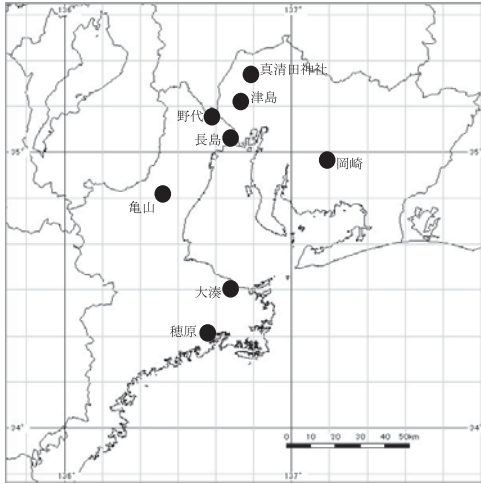


図 1：天正地震における伊勢湾周辺の被害地白地図作成ソフト「Kenmap」により作成

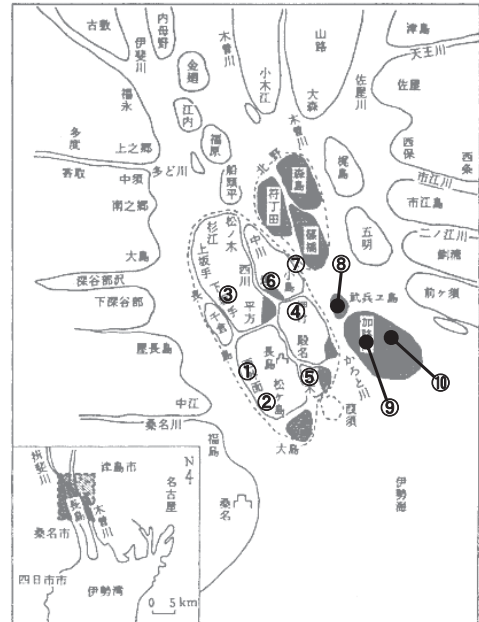


図 2：天正地震当時の長島の推定図（飯田 1987）

図中の丸数字は表 2 の被災地に対応している。

表 2 『長島細布』に見える被災地と被害状況

No.	被災地名	被害状況
1	にしのもむら 西外面村（長島城北）	長島城の殿門・矢倉・塀など破壊，石垣少し残る
2	とおあきむら 遠浅村	揺り込み
3	じぞうどう 地藏堂（下坂手村）	殿堂ことごとく破壊
4	いとうしちつきよじょ 伊藤氏蟄居所（押付村）	「オチオチニナリヌ」（地盤沈下？）
5	うぶがみひだかひのみや 産神日高日宮（長島町・又木村）	社頭転倒
6	ぜんこうじ 善光寺（理衛門屋敷）	地震により没亡
7	しのぼし 篠橋（小島村）	地震・洪水のたびごとに欠失（天正とは限らない）
8	ぜんだしんでん 善田新田	泥土となり土農ともに亡失す
9	かろしんでん 加路戸新田	泥土となり土民の家悉く転倒，人馬倒れ死ぬ
10	すわだいまようじんしゃ 諏訪大明神社（加路戸）	地震により転倒しわずかに神地のみ残る

※表中の No. は，図 2 中の位置に対応している。

このように史料からは、長島で地震による甚大な被害が生じていたことまでは分かるものの、水害（津波を含む）についてははっきりとしたことが分からなかった。

2-2-2. 亀山城

北伊勢地域以外の伊勢国内の被害状況については、亀山（三重県亀山市）の城郭被害を海外史料が必ず記していることに注目したい。これは、当時の亀山城がキリシタン大名である蒲生氏郷（1585年頃に受洗）の支配下にあったことによると思われる（城主は氏郷の家臣である関盛信）。『イエズス会日本書簡集』（『拾遺3』p59）には「亀山と稱する別の城は大混亂を來たして倒壊した。」とのみ書かれており、具体的な被害内容は記されておらず、実態はよく分からない。しかし、この城が被害を受けたことは、彼らキリシト教宣教師達にとって重大な事件であったことから、日本からの書簡に書き加えられたのだろう。

この当時の海外史料は、多くがキリシト教宣教師達によるものだが、このことから、彼らの書き残したものは日本におけるキリシト教と関わりの深い事象および場所についてであることに注意しなければならないことが分かる。

2-2-3. 尾張国・三河国

伊勢国以外の2国の状況を見てみると、尾張については真清田神社（愛知県一宮市）・津島（愛知県津島市）の被害史料が確認できる。

地震当時の津島は天王川の沿岸で栄えた湊町であった。そのため津島の地盤は悪かったと考えられる。『津島市史』で引用されている『津島神主領目録』（『新収1』p141）には「ゆりこみ」（地震陥没）によって田畑が被害を受けたとあるが、これは地盤の悪さによるものと思われる。また『津島市史』では、これが津島の衰微した原因の一つであるとしている。なお、天王川は天明五年（1785）に水害防止のために埋め立てられ、それによって津島は現在のような内陸に位置するようになった。

真清田神社（愛知県一宮市）の被害については、『真清田神社史料』（『新収1』p140）によれば「天正甲申地震、他堂構悉崩折、唯大宮礎基牢固、些不傾側矣、」とある。「甲申」は天正十二年のことで、恐らく誤りであろう。これによれば、真清田神社は基礎が堅固であったため傾くことがなかったという。一方で、『一宮市史 上』（『補遺』p83）には「真清田神社の楼門、廻廊、その他殿堂悉く転覆傾倒す。」とあり、『真清田神社史料』と異なり建物の被害があったとする。『一宮市史 上』がどのような史料に基づいているのか分からないため安易に判断するわけにはいかないが、『真清田神社史料』が少し神社の奇蹟を強調しているようにも見えることから、全く被害が無かったとは考えられず、何らかの被害はあったのではないだろうか。あるいは、「他堂構悉崩折」は真清田神社境内の建物（本殿を除く）のことを指しているのかもしれない。

なお三河に関しては史料が3点確認できるが、それらは地震があったことのみ記載であり、さらに1点の史料は三河のことを書いているのか不明といったものである。ここから考えると、三河では被害無し、揺れのみだったのではないだろうか。

3. 伊勢湾で津波は発生したか

さて、ここまで伊勢湾沿岸での被害状況を史料に即してみてきたが、はっきりと津波があったと記載している史料は見あたらなかった。では、伊勢湾では津波は発生しなかったのであろうか。

天正地震における津波については、『兼見卿記』（『補遺』p67, 『拾遺3』p33）やフロイスの『日本史』（『新収1』p138）が引用されるのだが、これらの史料で示されている津波の被害地は若狭湾沿岸や長浜（滋賀県長浜市）で、伊勢湾沿岸で津波があったとする記載は見あたらぬ。一方で、『舜旧記』（『武者1』p553・565, 『拾遺3』p39）には「近国」で津波があったとの記載が見え、これを畿内

近国と理解し、伊勢でも津波があった可能性を指摘することができそうである。

『舜旧記』の筆者である梵舜は、『兼見卿記』の筆者・吉田兼見の弟であった。そのため両者の間で情報のやりとりがあった可能性があり、梵舜が「近国」とするのは『兼見卿記』に見える若狭や丹後といった国々を指しているのだと思われる。以上のことから、「近国」に伊勢は含まれず、上記の史料からは伊勢湾沿岸での津波を想定することはできない。

伊勢湾沿岸で津波があったと書かれている史料は、現在のところ『度会郡穂原村役場調書』(以下『役場調書』、『新収 1』p151、『補遺』p84)に「大津波あり。」とある他には見あたらない。穂原は現在の三重県度会郡南伊勢町伊勢路の地名であるため伊勢湾沿岸とは言えず、仮にこの史料記述が正しかったとしても、伊勢湾内での津波の証明にはならない。また『役場調書』の記事が本当に天正地震を指すのか不明であり、他の地震津波と誤解している可能性もある。さらにいえば、この調書が史料から採録したのか、伝承の聞き取りによるものかも分からないため、情報の質の面からも怪しいと見ることができる。

飯田 1977 および 1978 は長島(三重県桑名市)での津波被害に言及し、その根拠として『長島細布』を挙げている。しかし、2-2-1でも述べたように、この史料は享保十五年(1730)成立の地誌であり、また津波による被害を記しているわけではなかった。つまり、長島での津波被害を示す史料はまったく存在しないのだ。

このように、伊勢湾沿岸およびその周辺での津波の存在を示す史料はなく、あっても近代以降に書かれた、根拠不明のものしかないのである。よって、これらの史料から天正地震による津波の存在をいうことは困難であると言わざるを得ない。

4. まとめ

天正地震における伊勢湾沿岸に関する史料の検討を行ってきたが、伊勢湾沿岸を津波が

襲来したという事実は見られなかった。このことから、仮に伊勢湾内で津波が発生していたとしても、それは数センチほどのわずかなものに過ぎず、目視では確認できない、何らの影響も与えない程度であったと考えることができそうである。むしろ、天正地震による伊勢湾内の津波は存在しないと積極的に否定することもできそうである。

飯田 1977 は、天正地震での和歌山県内について書かれた史料にみえる津波記事は 1605 年慶長地震津波によるものだろうとしている。その根拠はよく分からないが、その可能性は十分にありうるだろう。伊勢湾周辺についても、『役場調書』のような近代以降に書かれた文献に、天正地震によって津波が発生したとするものが見られたわけだが、これも和歌山県同様に、1605 年慶長地震による可能性はないだろうか。『役場調書』がどのような史料を根拠としているのか、また別の地震津波(例えば 1605 年など)と混同していないか、よく検討する必要がある。

今回は天正地震における伊勢湾沿岸に注目したが、同様に天正地震における若狭湾沿岸や 1605 年慶長地震による津波についてもより精緻な史料の検討が必要であると思われる。それは、今後の課題としたい。

なお本論は、原子力規制庁からの委託業務「平成 26 年度原子力施設等防災対策等委託費(津波痕跡データベースの高度化)事業」(代表:東北大学 今村文彦)の成果の一部をとりまとめたものである。

参考文献

- 飯田汲事, 1977, 明応地震・天正地震・宝永地震・安政地震の震害と震度分布, 愛知県防災会議地震部会, pp109
- 飯田汲事, 1978, 歴史地震の研究(1):天正13年11月29日(1586年1月18日)の地震の震害、震度分布および津波について, 愛知工業大学研究報告 B 専門関係論文集, Vol.13, p161-167

飯田波事, 1987, 天正大地震誌, pp552
武者金吉, 1941, 増訂大日本地震史料 第一
巻, 文部省震災予防評議会, pp945
東京大学地震研究所, 1982, 新収日本地震史
料 第一巻, pp193
東京大学地震研究所, 1989, 新収日本地震史
料 補遺, pp1222

東京大学地震研究所, 1993, 新収日本地震史
料 続補遺, pp1043
宇佐美龍夫・編, 2005, 「日本の歴史地震史料」
拾遺三, pp814